

水上瀧太郎全集

八卷

昭和十六年十一月二十五日印刷
昭和十六年十一月三十日發行

水上瀧太郎全集 八卷

會費參圓

著者 阿部章藏

發行者 岩波茂雄

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(33)一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元

東京市神田區
淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

精興社印刷 長譯製本

丁亂・不等全完品があまり直ち申出願ひすまお取致し

目次

戯曲

嵐	三
夢が たり 評議員會	二七
いたづら	四
良縁	七
武士と町人と狼	一六
地下室	一八
律子と瑞枝	三三

隣同志 二九三

姉と妹 三五九

短歌

ひとりの歌 四五五

歌 五二五

雜纂

海外消息 六三三

附記 六三七

課題葉書回答 六三九

紹介 六四二

追憶 六四四

慶應義塾應援歌 六四七

年譜 六四八

遺稿

ボオに關するノオト 六五七

春の旅 六九〇

觀劇雜感 六九二

無題一 六九七

無題二 七〇八

都會悲劇 七二〇

貝殼追放 七二九

歌稿 七三二

創作覺書一 七五二

創作覺書二 七六五

創作覺書三 七八二

後記 一

全集刊行後記 九

戲曲

嵐

人
物
主
人
妻
主
息
子
主
人
の
母
娘
姉
妹
別
荘
番
女
中
二
人

海に近き別荘の一室、西洋間。

中央に圓卓、卓上に洋燈、電燈消えたる心。卓を圍みて椅子三脚、籐の寢椅子一脚。舞臺後方に玻璃兩開きの戸、其兩側に玻璃窓、戸の外、窓の外は廣縁の心。右手に木造の戸。

卓を圍む椅子に母、妻、妹、腰かけ、壁に近き寢椅子に毛布をかぶれる兄横たはる。弟は母の膝にもたれて立つ。一同寢衣に細帯の姿、弟のみ白き改良寢衣。

窓外激しき暴風雨。不安。長き沈黙。

妹 「お母さん、海嘯つなみぢやあないの。あら、浪の音が段段近くなつて来るやうだわ」（立上り窓外を注意す）

妻 （同じく窓をふりかへりつつ）「大丈夫ですよ。黙つてゐらつしやい。海嘯なんか来るものかね」

妹 「だつて来た事もあるんでせう、（突然聲高く）ねえおばあさん、あの大佛様の御堂が流れたつて云ふのは何年頃いつの事なの」（母無言、聞えざるものの如く動かず）「おばあさんたら」

妻 「黙つていらつしやい、昔の事ですよ」

妹 「今だつて海嘯に變りはないわ」

妻 「うるさい人ですねぇ、静になさいな」

一際烈しき風雨窓ガラスに當る。無言。無言は恐怖を誘ふ。姉を先きに女中二人同じく寝衣に細帯。右手の戸より夜具を運ぶ。

女中 「奥様こちらにお敷きになりますので御座いますか」

妻 「まあ其處に置いて行けばいいよ。(女中去る)お父様は如何なさつたのだらう」

姉 「まだお二階にゐらつしやるでせう、ぢいやに盥を持つて來いつて云つていらつしやつたわ」

妹 「姉さん、盥を如何するの」言葉終らざる中、右手より主人「お父さん」

主人 「どうもひどいね、まるで吹抜けのやうに雨が落ちて來たには驚いたよ、しかたがないから盥でそれを受けようといふのだがね、なかなかうまくいかん、方々から漏るのだから」

妻 「どうしてそんなに漏るのでせう」

主人 「もう屋臺が古くなつたからな。家中で無事なのは新築の此室ばかりだ」

妹、立上り、父そのあとに坐す。姉と妹肩と肩をくつつけて父と母の間に立つ。主人、卓上の煙草を取りて火をつける。

嵐
姉 「お父さん、大丈夫。海嘯ぢやあななくつて」

妻 「大丈夫だつて先刻さつきから云つてるぢやありませんか」

姉 「けれども随分ひどい嵐だわねえ」

主人 「ひどいとも、風ばかりか、何分この雨だからな。早くをさまつてくれればいいが」

姉 「宅うちは流されちまやあしないでせうか」

妹 「心配だわね。お父さん、宅は流されやあしないでせうか」

妻 「うるさいねえ、黙つていらつしやいつたら」

稍長き間。風雨烈しく家をゆする。

妹 「姉さん。鶏が鳴いてやしなくつて」(間)「あら又鳴いてるわ、如何したんだらう」(間)「姉さん

鶏は小舎こやに入れてあるんでせうか」

妻 「鶏なんか如何なつたつていいぢやありませんか」

妹 「だつて心配だわ、可哀さうなもの」

妻 「騒いでもしかたがないからお休みなさい」

妹 「あら次郎さんは居眠りしてるわ」

妻 「ほんとにねえ」(姉にむかひ)「美代さん、床を敷いておくれ。おばあさんもお休みなさいな」

姉、室の隅、床の上にふとんを敷き、妻、其上に弟を寝かす。

妻 「さあさあ、お前方もお休みなさい」〔母の傍に行き耳の邊りにて〕「おばあさんもおよつたらいいでせう」

母 「いいえ私は眠くない」

妻 「でも横におなりなさつた方が」

主人 「いや、此の物音では寝られるものではない、早く夜明けになればいいが」〔いひながら卓上の懐中時計を見る〕「まだ一時少し廻つたばかりだ、女中達は如何したらう、あの雨漏りのする室ではたまるまい。美代。皆此方に来てと呼んでおやり」〔姉妹、とうなづきあひ手を取りあつて出てゆく。後から〕「おいおい、ついでにウイスキイの瓶びんを持つて来ておくれ、戸棚にある筈だ」〔一際烈しい風の音、ガラス戸の音高く鳴る〕

妻 「なんてひどい嵐でせう、海嘯にでもなりやしませんか」

主人 「そんな事もあるまい」

妻 「でも波の音が段段近くなつて來ますよ」

主人 「それは耳についたからだ。だがひどい嵐だよ、今朝はあんなにいい天気だつたのに、見

嵐

てる間に曇つてしまつて、夕方俺が散歩に出た時は、もう濱中波が打上げてゐた。海岸の家は危ないな、これでも宅うちなどは一丁でも離れて居る丈だけしなのだ」

妹、ウイスキーの瓶を持ち、姉、盆コップに高杯コップをのせて來り卓上に置く。

妹「お父さん、女中達は皆寝てますよ。盥うや桶づで、雨漏りを受けながら室の隅つこに床を敷いて」

妻「呑のん氣きですわねえ、よくもそんな中で寝られるぢやありませんか」

主人「晝間の仕事が烈しいからだ」(ウイスキーを手酌てしやくで飲む)「一郎を御覽、一日濱邊を駆廻つて疲れてゐるからよく寝てゐる。次郎だつてさうだ。何もしないでぼんやり暮してゐるお前達ばかりだよ、眠れないのは」(ウイスキーを飲む)

妹「だつてお父さんも眠れないつて云つたぢやありませんか」

主人「左さ様さまかハ、、、」(又酒、問)

姉「暗い洋燈ランプねえ」(心を出す)「電氣は如何してつかないんでせう」

主人「電線に故障があるからさ、電信柱でも倒れたのだらう」(問)

姉「あら、私忘れて居たわ、お二階に琴を出しつ放しにして置いて、雨が漏るつていふのに如